



普賢如方通草 全

特別
~4
1295





八
1295
卷

等貴詠草

隆代弘賢等詠草

天文廿二年十月十日

日

御學

相國寺万松院住侶永崇

天文廿年十月五日
百首 其外詠草

左なる周合ヤナニ越タ

相由寺水堂へ 誦草一巻

一冊 扱くさる物も見え

てしとらん 去書物と見え

皆く水堂へしよと 扱くさる

此水堂へしよと 扱くさる

是く知方と 扱くさる

ろくさる物と見え

相由寺万松院寺貴

永崇

誦草

百首 一巻日待と 永守

妻世首

律音月時身明のりけさになり 妻や 治まれば河法

り子白松を記の形とあり けやまをわの神のま

鳴るるもこの言の書は けりよこそと けりよこそと

今の日れあるまきり けりよこそと けりよこそと

妻の日のれあるまきり けりよこそと けりよこそと

妻の日のれあるまきり けりよこそと けりよこそと

妻の日のれあるまきり けりよこそと けりよこそと

妻の日のれあるまきり けりよこそと けりよこそと

妻の日のれあるまきり けりよこそと けりよこそと

妻の日のれあるまきり けりよこそと けりよこそと

易経

あやまかりの初めはくちかきとて其のくちかき

子の首

あやまかりの初めはくちかきとて其のくちかき

照打

あやまかりの初めはくちかきとて其のくちかき

平らぬ

あやまかりの初めはくちかきとて其のくちかき

橋

あやまかりの初めはくちかきとて其のくちかき

雲

あやまかりの下葉はくちかきとて其のくちかき

物事人

あやまかりの初めはくちかきとて其のくちかき

事

あやまかりの初めはくちかきとて其のくちかき

氷室

あやまかりの初めはくちかきとて其のくちかき

油漬

あやまかりの初めはくちかきとて其のくちかき

道和後

三のりきしほこまきとほく染くあつ書
録世首

立録

とありや書れは染るくはあふくし神

七ク

笑もあれひりのきまふのこらまふあまの

積積

ふらふらあれあれ夕暮にくはえさふあ
とやん

わらわ

神あまにさくつらひのあまを神のあまの

落

はよまのあまにさくつらひのあまを神のあまの

新道

舞をのふらやさうにらるあまのひさしきあ

蘭

舞のあまにさくつらひのあまを神のあまの

新

舞あまにさくつらひのあまを神のあまの
の下

神の御心
神の御心
神の御心
神の御心
神の御心
神の御心
神の御心
神の御心
神の御心
神の御心

鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿

鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿

鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿

鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿

権

鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿

権

鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿

権

鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿

権

鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿

権

鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿
鹿

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

水

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

思立
あつちの山は多し
あつちの山は多し
あつちの山は多し

不逢立

いふまじあつちの山は多し
いふまじあつちの山は多し

逢立

あつちの山は多し
あつちの山は多し

別立

あつちの山は多し
あつちの山は多し

逢不逢立

あつちの山は多し
あつちの山は多し
あつちの山は多し

思

あつちの山は多し
あつちの山は多し

行

あつちの山は多し
あつちの山は多し

恨

あつちの山は多し
あつちの山は多し

新井文

物 神の御存に下りてあるまじ
神の御存に下りてあるまじ
神の御存に下りてあるまじ
神の御存に下りてあるまじ
神の御存に下りてあるまじ

松

あまの御存に下りてあるまじ

竹

あまの御存に下りてあるまじ

石

あまの御存に下りてあるまじ

雲

あまの御存に下りてあるまじ

山

あまの御存に下りてあるまじ

野

あまの御存に下りてあるまじ

水

あまの御存に下りてあるまじ

土

あまの御存に下りてあるまじ

述懐

物もさるる方ものいふは何と云ふもたゞ
日の光は母のこころの光なりとてけしき

易依之主願神少之 戊刻初魚付成花早

切依之脚 三五軒多力者也

元文廿二年 拾月十九日

伊勢の方所をくし所辨人つて

少きつて海のみや下あつたそら地りん
物もたれちるさくさくやちまうし市上

きつたりききるさくさくやちまうし市上

本指も梅よきさくさくさくさくさくさく

あまのいほ屋わちや冬は梅

今ありて冬移りし松の松

いづれかおとしの松
ありて
り画いありまらんのかしら

文世二年正月十四日也山出まき師

石門の松あり
月宵 遊子
神遊

世首

海と松

白浪とらたて
舟の松あり

雲松を

うらまはらふの句も松をまよと句にまよす
わたり

野一草

わたり松ありの句も松をまよと句にまよす
わたり

去曉月

去月やうらむしれははの千の神あつとせつ

油乃神

うらむらたふえんやうらむ去月ありと神

見山也

きよとにやちあはれとこののちのちのち

借名也

西風よおの神の神のれとらりといふまよと

ねと友

去深のちのちとてあはれとあはれとまよと

山木の千とせれけとまのちのちとまのちの友とあ

苗代蛙

おるまのちのちとあはれとあはれとあはれと

苗代浦

世の世とあはれとあはれとあはれとあはれと

忠海也

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

不道也

山木のちのちのちとあはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

初巻

かきとに今うらむとさきかたむかへてくたあけちの

鶴別巻

にのまに月ちえらむらえらるの持うかたは

作力

とまこころは海とまきにてまのたあやん

くみ松のまらうん

まは海や海船のまらうん
まはれらるるまの時のこのねよりうらむん
後家

りうむらひの神のまら松の凡の細方のまら

古巻

かきとに今うらむとさきかたむかへてくたあけちの

夕巻

日あつたあけちのまらとこねうらむや山の神の

社巻

と地ののまら代りも唐つまらる指とあやまの
右之巻
係方宮ち明神と立願而秘道之系

三ノリケノ方お方津下城

尻みさきとさきお方やにさしり

しりきとねとさりのいしり

不申

三ノリケノ方お方津下城

くねしききやり来といはし

五月十日お方は願てまうす百款初り

水ねて深きにいねやうとまき

楽たさむ風のまうとつお苗お

後百款 三世

おさきりねとらにーりきらりねお

いりきらりねとらにーりきらりねお

坊しきさきらり

さきらり

まをいりきらりねとらにーりきらりねお

いりきらりねとらにーりきらりねお

いりきらりねとらにーりきらりねお

いりきらりねとらにーりきらりねお

ふはる瓜と初ら祥

まはる瓜と初ら祥

ふはる瓜と初ら祥

ふはる瓜と初ら祥

ふはる瓜

ふはる瓜と初ら祥

ふはる瓜

ふはる瓜と初ら祥

ふはる瓜と初ら祥

ふはる瓜と初ら祥

ふはる瓜

ふはる瓜と初ら祥

ふはる瓜と初ら祥

ふはる瓜と初ら祥

ふはる瓜

ふはる瓜と初ら祥

ういさふさふさめえらるや代の家

うりせうう山田草一五種は年とてあやとて

あまき草

たうそこのけぬきうに子らえんまや舞にうりたは陸

山稻苑

う移子凡に能くかしぬうりまの神しくは

舟り部云

うのひれ月う候あひまひんやんはくは武蔵守とらけ

初舞凡

うはまこあまきのにまににうそこのるあひれくあはれ

海を舟

川きりくあはれ月ひらあひれくそこ

あはれ

あはれをこまにうらあひれあはれあはれあはれ

あはれ

まあやほそてにうきあひれうりのたうらう

あはれ

あはれはうらあひれあはれあはれあはれあはれ

あはれ

あはれあひれにうきあひれあはれあはれあはれ

あはれ

あはれのゆもあひれあはれあはれあはれあはれ

古一冊以等平大和為其終中課國田子也
其子也細之也子之厚原不固了允子之也也
文政三年六月十日
源如蹟

